

研究ノート

保健体育科教員養成課程における「ダンス」授業と学生の変容 — 体験型学習法による授業記録から —

犬飼 己紀子・田玉 雅美・橋爪 みつる

Transformation of Students through "Dance Classes" in the Teacher Training Course
of Health and Physical Education:
A Teaching Report of the Experience-Oriented Learning Classes

INUKAI Mikiko, TADAMA Masami, and HASHIZUME Mitsuru

要 旨

2008年学習指導要領中学校「保健体育科編」に「ダンス」が男女共修の必修として組み込まれた。さらに、2016年12月中央教育審議会答申には、生徒等の主体的で対話的な学びを教師がどのように組み立てていくか、その改善と充実が求められている。単元「ダンス」においては、「創作ダンス」や「現代的なリズムのダンス」の授業を課題解決型学習として捉え、仲間と課題に取り組むことで、コミュニケーション能力や論理的思考に向けた体験型学習として、心の解放と身体で表現する互いの感情を受け止め合うことが期待される。そこで求められる指導者の関わりには、生徒相互の交流を引き出す豊かなコミュニケーション空間を創造する技術と考える。

本論は、2017年度の「ダンス」講義記録を研究ノートとしてまとめ、指導者の関わりと学生の変容を記録に残して振り返るとともに、学生には指導者としてまた教師として生徒に向き合う姿勢を体験的に学ばせようとしたものである。

キーワード

ダンス授業 教員養成 指導内容 指導方法 学生の変容

目 次

- I. はじめに
- II. 教員養成課程における「ダンス」指導研究
- III. 授業経過記録
- IV. 受講者の感情の変化から「ダンス」授業評価を読み取る
- V. まとめ

文献

I. はじめに

2008（平成20）年3月に学習指導要領の改訂がなされて以降、子どもの育ちを取り巻く環境の変化は学校現場が抱える課題の複雑化や困難化を生んでいる。併せて現代社会はグローバル化の進展や人工知能の社会進出により、子どもたちが巣立つ数年後の社会雇用状況も予測が難しいとされる。このような状況を踏まえ中央教育審議会で新しい時代に即した学習指導要領のあり方が検討されてきた。同審議会では子どもを取り巻く様々な環境の変化に対応し、次代に生きる子どもたちに求められる資質・能力を育む教育の課題に向けた学校教育の改善・充実について、2016（平成28）年12月21日の中央教育審議会答申に、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について¹⁾」として示した。学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指そうと掲げられた6項目には「どのように学ぶか」、「一人ひとりの発達をどのように支援するか」が挙げられており、一人ひとりの発達を踏まえ生徒等の主体的で対話的な学びを、教師がどのように組み立てていくか、その改善と充実が求められている。

指導要領改訂となった中学校学習指導要領「保健体育編²⁾」では、中学1・2年保健体育に、「ダンス」が男女共修となって必修に組み込まれ、2011（平成23）年度までの3年間の移行期を経て、2012（平成24）年度からは全ての中学校に於いて完全実施されている。単元「ダンス」の内容の取り扱いとしては、「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の3種目から1つ以上を選択履修できるようにすることとしている。新学習指導要領の施行を受けて、中村が実施した東京都公立中学校教諭への「調査実施ダンス種目の採択理由³⁾」

（2009年）によると、ダンス必修化に向けた今後の意向として、3つの種目の内「現代的なリズムのダンス」を採択する傾向が見られ、その理由として、

踊る楽しさが味わえる、男女ともに興味・関心が高い、恥ずかしがらずに取り組める、リズム感などが現代っ子に馴染みがあるなどを挙げている。しかし施行当時は生徒のニーズに応えようとするその一方で、「現代的なリズムのダンス」の指導方法に苦慮する体育科教諭の姿が多く報道されていた。中村はさらに授業担当者に向けダンスの指導方研究・教材研究の有無について状況調査⁴⁾し回答を得ている（2013年）。それによると、ダンス必修化に向けての指導方や教材研究については、ダンスを担当する指導教諭が忙しくて時間がとれない、適当な研修会や教材が見当たらない、研修を受けてもすぐには身につかないなど、ダンス必修化に向けての研修参加や教材研究の必要性を感じながら導入に向けた対応ができていないことを窺わせた。10年が経過した今、子どもたちの「ダンス」への志向は高まりを見せ、地域のダンススクールのレッスンに通う児童や、学校の課外活動として生徒らが好んで踊る姿も多くみられるようになった。中学校体育でのダンス必修化の実施について、現代的なリズムのダンスを教科として取り込むことに対し、外部指導者の登用を始め様々な取り組みが報告されているが、今まだ多くの学校においてフォークダンスや現代的リズムの音楽に合わせた既定の振り付けを真似て踊るといった授業が多くみられる。

中学校でのダンス必修化は、踊る楽しさを体感したりダンスの魅力を知らしめる機会が増えたこととして歓迎できる。また、生涯スポーツへの進展に向けた学習チャンスでもあるとする一方で、男女共修により男性教諭の多くが、新たにダンスを担当する必要が生じている。とりわけ、これまで女性教諭にゆだねられる傾向にあったダンス指導については、創作ダンスの体験はなく、現代的なリズムの動きに乗ることにも困難さを感じている教師にとっては悩ましい単元であり、担当する教師の授業展開への不安定感や教材研究の不足などからダンス指導に苦慮する教師の姿もうかがえる。このような状況にあって具体的な実施に向けては、指導者が取

り組みやすいフォークダンスや、規定の動きを覚えて一斉に踊る伝達指導型の授業展開が予想される。中学校ダンス男女必修への取り組みは、学習機会の増大という利点の一方で、授業内容の質の低下や学習成果の二極化を生むことが懸念される。

新学習指導要領に掲げられた「ダンス」必修化のねらいとは、「イメージを捉えた表現や踊りで仲間とのコミュニケーションを豊かにする」ことを挙げ、「イメージを捉え感情を表現することの楽しさ喜びを味わう」ことを主眼としている。「創作ダンス」や「現代的なリズムのダンス」の単元導入については、課題解決型学習として、コミュニケーション能力や論理的思考に向けた体験型学習としてその成果が期待されている。グループワーク形式で授業を展開することで、他の運動領域とは異なる体のリラクセーションを生み、仲間と課題に取り組むことで、心の解放と身体で表現する互いの感情を受け止めることを掲げており、そこで求められる指導者の関わりには、踊りの伝達のみでなく生徒相互の交流を引き出す豊かなコミュニケーション空間を創造する技術が求められる。

このことから教員養成において、学生らにダンス授業を通じた多様な学習効果について体験的に学びを深めておくことは重要であろう。中学校「ダンス」男女必修化は、1年次から経年的な積み上げ式による授業展開が求められる。個人の技術が目に見えて評価でき、またチームの勝敗にも影響する、といった他の運動種目とは異なる特質を持つダンスの学習内容を、段階を踏みながら創造的視点で捉え、指導者がファシリテーターとしての立ち位置で参画しサポートする側に立つことができたなら、必修化となったダンス授業は生徒が主体となり教師と共に創り上げる体験学習型授業展開への変換に繋がると考える。

本稿ではダンス授業を、生徒が個々に持つ感情や心性を引き出し、相互に学び合うためのグループワークと捉え、体験学習型授業展開に向けた教師の関わりに視点を当てその教授法を探っていく。

Ⅱ. 教員養成課程における「ダンス」指導研究

2008年(平成20年)新学習指導要領の改訂による「ダンス」必修化に向けた4年間の移行期間と時期を同じくし、松本大学人間健康学部は2011(平成23)年に開学来4年を経た完成年度を迎え、カリキュラム改訂を行なった。新カリキュラムでは、教員養成課程に学ぶ学生に「体育実技Ⅰ(体づくり・ダンス)」(以下「ダンス」と記す)を選択必修科目として位置づけている。本論では、2017(平成29)年度の「ダンス」講義記録を研究ノートとしてまとめる。指導者の関わりと学生の変容とを記録に残して振り返るとともに、受講する教員志望の学生と授業担当する指導者との関係を学習指導要領「体育」でのダンスの指導・展開と方法に映し、指導者としてまた教師として生徒とどう関わるかが求められるか、その姿勢を体験的に学ばせようとするものである。

1. 教職課程履修学生に向けたダンス講義の展開

8月7日(月)から8月10日(木)の4日間にわたり、「ダンス」を集中講義(1日4コマ)の形で実施した。2017年度、「ダンス」を履修する学生は19名(女子15名・男子4名)である。内、教職に必要な科目として受講する学生は11名、一般学生が8名であった。教職を目指す多くの学生は、これまで単一のスポーツ種目に傾倒してきた体験を基に「保健体育」の教師を目指す学生が多くを占める。概して、ダンスの授業に苦手意識を持つ傾向が強いことが予想される。

1) 対象学生

松本大学人間健康学部スポーツ健康学科、
19名(他2名・天候等による欠席超過)

2) 指導者:非常勤講師

田玉 雅美 長野県蟻ヶ崎高等学校 教諭

橋爪みつる 長野県諏訪二葉高等学校 教諭

3) 開講日・開講形態:集中講義

2017年8月7日～10日(4日間・全15コマ)

4) 体験型学習の手法で進めるにあたり、指導者(2名)間のコンセンサスを重視した。

①踊ることで自己を解放し、身体全体の動きで表現することの楽しさを知る。

②身体を動かしながら、自然なうちに「自由な動きの表現」に引き込む技術を学び、自分の感情の変化に気づく。

③自己の体験を踏まえ、生徒に向き合いダンスを教授・展開する指導者としての技術(スキル)や、姿勢・態度を学ぶ。

2. 対象学生の「ダンス」履修目的

2011年に教職課程の選択必修科目として「ダンス」を開講以来、これまで履修学生は全員が教職課程に学ぶ学生であった。開講7年目に当たる2017年度履修学生の特徴として、全体の3分の1が教職課程以外の一般学生であったことが挙げられる。夏季休暇中に集中講義の形で開講される授業を必修外の枠組みで受講しようとする一般学生の様子から、踊ること、それ自体を楽しもうとする学生が増える傾向にあることがうかがえる。図1は終了後のレポートから探ったものだが、履修前に抱いていた「ダンス」に対する姿勢の違いがうかがえる。

教職課程に学ぶ学生のダンス受講姿勢を見ると、苦手意識や嫌い恥ずかしいなど履修前には何らかの抵抗感を抱いている学生が半数以上おり、履修の目的を教職課程に学ぶための必須として捉えていることがうかがえる。一方の一般学生の姿勢をみると1名を除き意欲的な姿勢をうかがわせており、例年にない履修学生の目的志向の差が見て取れる。これを指導者がどのように受け止め関わり、学生個々の表現を引き出していくか、全課程を記録に

残すことは、学生等が教師となってダンスの授業を展開する立場に立った時に、貴重な体験学習の意味を持つと考える。

教職課程の選択必修授業として組み込まれている「ダンス」の集中講義について、非常勤講師2名で関わることから、指導者間のコンセンサスは欠かせない。展開前に講義シラバスの再確認と併せ、授業の目的、学習のねらいに即し事前の打ち合わせを行い、15コマの授業内容を計画(表1)して臨んだ。

1) 第一段階:踊ることで自己を解放し、身体全体の動きで表現することの楽しさを知る。

2) 第二段階:身体を動かしながら、自然なうちに「自由な動きの表現」に引き込む技術を学び、自分の感情の変化に気づく。

3) 第三段階:自己の体験を踏まえ、生徒に向き合いダンスを教授・展開する指導者としての技術(スキル)や、姿勢・態度を学ぶ。

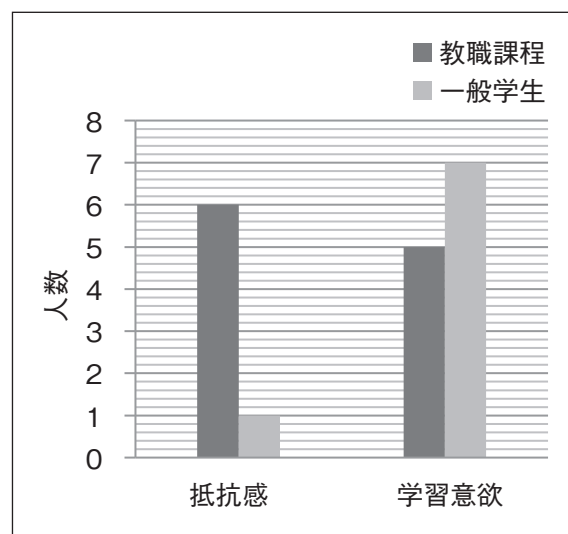


図1. ダンス履修に対する姿勢(受講前)

3. 講義計画

表1 2017年「ダンス」集中講義 授業計画(田玉・橋爪)

テーマ：形から自由へ、解放から社会性創造へ（解氷から再結氷に向けて）					
日	回	指導計画・講義内容	指導者の関わり	受講生の変容	動き
1	1	①体ほぐしとコミュニケーション ②ジェスチャーゲーム ③二人組みの動き(他グループとの関わり)	・専制型指導?民主型指導へ ・移行する指導内容、人数、配慮など、教師としての生徒への言葉がけ、関わり方を助言する。	・自己防衛的受身姿勢から、他者受容、自己解放へのプロセスを動きの中で体感する。	動
	2	①即興の動き(模倣、イメージを動きに表す) ②手のひらをあわせて ③割り箸を使って	・音楽、リズムを捉えて動きに変換するきっかけ作り。 ・他者と繋がり動くことで作り出される造形の美しさに気づかせる。	・音楽を動きに変換する楽しさを発見する。 ・相手の動きを感じ相互作用から生まれる非日常的な動きを体感し、身体表現による造形の美しさを知る。	動 静
	3	①ダンスの成り立ち(国や文化から生まれる音楽とダンス) ②日本のフォークダンス	・資料、音楽を使った講義 ・文化から生まれる音楽や動きの違いを伝える。	・文化が生んだ音楽や動きの違いを知り、人の生活とダンスが密着してきたことへの理解と現代のダンス(表現型)との違いを知る。	静
	4	③世界のフォークダンス(サンバ)	・文化から生まれる音楽や動きの違いを伝える(サンバ)。	・サンバのリズムと動きを感じ、自由な動きからグループの動きにつなげる。	動
2	5	①現代的なリズムのダンス	・リズムに乗って動く楽しさに重ね、動きをわかりやすく伝える言葉がけを学ばせる。	・受身から能動へ、学ぶ楽しさと教える楽しさを知る。	動
	6	②現代的なリズムのダンス		・動きの見せ方伝え方を工夫できる。	動
	7	①動きづくりI(グループで動き創り)	・テーマにあった動き(モチーフ)を模索させる。	・モチーフのバリエーションを増やしていく。 ・様々な動きを許容し合う。	動
	8	②動きづくりII(グループの動きを繋いでひとつの作品にする)	・テーマからテーマへ、動きから動きへのつながりも作品としてイメージさせる。	・作品としての全体像を捉えながら、グループにおける自分の役割を知る。	動
3	9	①創作I(グループ)	・創作に繋がる題材の助言	・テーマ決めにおける討議	静
	10	②創作II(動き創り)	・動きのモチーフの変化(空間、緩急など)、見せ方等の工夫や指導時のアドバイスの仕方に気づかせる。	・グループの方向性や動きを探る中で、討議を繰り返し相互理解・解放を促進させる。	静
	11	③創作III(中間発表)		・他グループの作品を見ることで、動きを深める。	動
	12	④創作IV(動きを深める)		・視覚教材をつかい、身体表現の良さや違いを認めあう。	動
4	13	⑤創作V(完成)	・変化、起伏のある作品に仕上げる声かけ。	・ひとつの作品として完成させる。	動
	14	発表・鑑賞	・発表の環境設定	・他グループの作品の違いや良さを認める。	静
	15	VTR視聴 レポート まとめ(再結氷)	・体を動かしながら、自然のうちに、「自由な動きの表現」に引き込む技術を学び、体験で得たプロセスをふり返ることで、自身を内省し、感情の変化に気づかせる。	・身体表現活動を通し、個人やグループが変容していったプロセスに焦点をあて、ダンス授業を通して得た気づきを発表し合い、個々の学びを日常(指導場面)に生かす。(社会化)	静

Ⅲ. 授業経過記録

1. 指導者の関わりと 学生の変容プロセス

授業の展開について、大きく3つの段階を踏み進めることとした。第一段階では指導者が前に出て学生を牽引し分かりやすく大きな動きと声でリードし、集団内に許容的雰囲気を引き出すことで一人ひとりの身体と心の解放をねらう。第二段階では現代的なリズムに合わせた動きの習得を課題とし、個々の自由な動きを引き出し表現のバリエーションを増やしていくこと。そして作品づくりとなる第三段階では、iPad Proを活用し学生同士で互いの動きを自由に撮影し合い自らの動きを確認して修正を加え、動きによる表現と空間づくりを練り上げていくことをねらう。授業を進める中で指導者の意図（ねらい）が、受講学生にどのように伝わり受け止められているかについて、学生の変容を指導者の視点で捉えて記録するとともに、終了後の学生のレポート分析、及び中盤と終了時の2回実施した『気分プロフィール検査（profile of mood status）』（以下POMSと記す）の数値から、学生の感情変化と行動変容を探ることとした。

1) 第一段階

学生個々の様々なダンス経験や意識を探ることを目的に、ダンスに対する感じ方や思いについて簡単な調査を行った。そこで見えてきたことは、履修目的が単位取得のためでありダンスへの苦手意識を主張する学生がいる一方、踊ることが大好きというダンス部員の参加がいるなど、開始以前に受講する学生集団に意識の二極化がみられた。講義計画（表1）の通り開始1コマ目は「踊る」のではなく、ジェスチャーゲームや2人組の動きを通してまずは「動く」ことを中心に活動を進めた。前年度までの履修学生と同様の反応を期待し、動きに対するイメージを崩した自由な動きを誘い自己防衛や緊張

からの解放をねらったのだが、アイスブレイクを意図して取り込んだこれらの活動は、ダンス経験者とそうでない学生が混在していたことで受講者に混乱を抱かせる結果を生んだようだ。ここでは、指導者の意図に反して例年よりも多くの時間を費やすことになった。そこで、少しずつ変化を見せる学生の姿を活動の段階を追って記録に残していくこととした。2人組の動き、縦列での模倣の動きでは、声を出して動き続けられること、相手の動きを模倣する楽しさを感じることができた。ジェスチャーゲームでは、チーム対抗で正答数を競わせ学生のモチベーションを刺激するとゲームのテンポが速まり、同じテーマであっても人により表現が違うことに気付いたり、仲間に正答を求めようとよりはっきりした大きな動きでジェスチャーに挑戦する学生が出て、表情も笑顔に変わり自然に身体の動きが大きく解放されていく様子を観察することができた。

2コマ目の活動では、3分程度の音楽1曲に振り付けた動きを全員で踊った。ここでは動きをカウントでコールするのではなく、振り付けを言語化し全員で歌うように声に出して動くことで十分な運動量を得ることができ、また、自分の動きが他人にどのように見えているかという不安を持たなくなり、ダンスに対するそれぞれのイメージは徐々に崩れていく様子が見られた。学生等には、ダンス授業の導入部分としては最も大切な部分であり、教師となって展開する実際の授業では指導者自らが開放的なイメージを創造し感じさせることを意識して展開してほしいと感じている。授業展開の第一段階を振り返ってみると、昨年までの授業体験を基に取り入れ実施したアイスブレイクで集団内の緊張を解放していくことをねらったが、受講目的が同質であった昨年までの授業展開とは異なり、ダンスに対する経験・知識・感覚・技術などの点で異質とも言える学生一人ひとりの参加姿勢や活動への受け止め方の違いを思い知らされることとなった。第一段階では導入の部分の「崩し」については、対象アセスメントを押さえた上でさらに工夫して取り組むこと

が必要であったと感じている。

2) 第二段階

教師を目指す学生らが指導者として世界文化としてのダンスの成り立ちを知ることは必須である。ここでは、ダンスの成り立ちや世界各国の音楽を聴き、ダンスが世界の文化と深くつながり、音楽もまた文化を反映させたものであることを理解した上で、サンバのリズムに乗せたフォークダンスと地元で愛される“松本ほんぼん”を全員で踊った。次の段階として、北アメリカで進化して現代的なリズムへと発展したヒップホップの動きに入った。サンバでは、1人の動きから2人の動き、グループでの創作、グランドチェーン（2人組のクロスチェーン）へとつなげた。グループ創作は、前段階で創作を行っていたことで円滑に進めることができ、アイデアも出し合う様子がうかがえた。グランドチェーンでは、発声と協力が必要となるが、達成感を感じさせるために目標回数を決め課題に向き合う姿勢を生むこととして、1日目のまとめに位置付けている。

2日目の現代的なリズムのダンスでは、曲のリズムに合わせた複雑なステップや動きを覚えていく。ダンス経験のない学生は、最初は戸惑う様子であったが、練習を重ねて動きを習得していった。最初は、取り組み方に温度差も感じられたが、繰り返し行うことで動きがつながり、運動量も多いことから音楽に乗る楽しさ、ステップを習得する達成感が快感情へと変化していった。7コマ目からは、自由に動きを表現する活動に入った。1つのテーマから連想する動きを重ねることで作品に仕上がっていくことを体験的に学ぶことをねらった。今回は「スポーツ」をテーマに動きをイメージさせて実施した。多様なスポーツ種目の特徴的な動き、感情、場面など各グループで創作を重ねていく中で、テーマから想像した個々の動きをどのようにつなげていくのかに戸惑う様子が見られた。そこで、ここでは指導者も学生と共に動き、自由に表現する姿を見せることで個々のイメージを引き出し、創作の幅を広げていくこと

ができた。動きにつながるきっかけや具体的な声かけについては、常に学生の様子を観ながら小さな動きを瞬時に捉え、関心を示すことで特徴ある動きを引き出し、グループで一作品を仕上げる体験に繋げていった。

3) 第三段階

最終的な創作ダンスに向けて、グループ作り、テーマ決定、曲選びの段階となった。創作は、2つのグループに分かれて、テーマから連想する風景、状況、風物詩などを付せん書き出し創作を開始した。動きのテーマを決める段階で、前年度の作品を鑑賞した。つながりや、形を決めない自由な発想と動きを感じさせることを意図したビデオ鑑賞であったが、指導者のねらいに反し完成された作品を視聴したことで学生等のイメージが固まってしまう、その後の創作に向けた話し合いや動きのスピードを低迷させてしまった。創作の過程では2つのグループのテーマが類似してしまったこと、それぞれの作品の運び方が対称的であったことが、活動の妨げになったと感じている。また2つのグループの進捗状況には差があり、創作に入った2日目の終盤では最終日の展開に不安を残したまま終了することとなった。

指導者2人が不安を抱えて迎えた最終日、スタート時点で創作がやや遅れていた班の学生が、いち早く行動し始めた。学生の雰囲気が変わり、創作も順調に進んだ。それに影響されたもう1つの班も活発に動き始め、指導者の不安は一気に解消された。決めたテーマに沿ったモチーフや動きの流れ、ストーリーを全員で考え共有し、互いに関わり対話しながら進める中でチーム内の相互理解が深まり、引き出されたモチベーションが向上心に繋がり創意工夫を重ねより良い作品へと仕上げられていった。

最終段階では、ダンスの経験有無に関わらず、学生それぞれがアイデアと意見を出しあう様子がうかがえた。学生等は本講義「ダンス」の初期段階の

目的である自己解放をさらに促進させ、履修前に抱いていた「ダンス」学習に対する姿勢や不安感を払拭したように、互いに主張し受け止め合い作品を仕上げることに向き合っていた。その姿はより良い作品に仕上げたい、また表現している意味や感情を作品を通して観る人に伝えたいとの思いをうかがわせるグループ発表へと繋がっていった。

創作の段階で、学生の動きが止まることがある。頭で考えようとする行動は静止という形で現れるが、そのような場面で指導者が動きの幅やモチーフのアイデアなど導き出すことで、学生が新しい動きを発見することもある。この段階で指導者は学生の一人ひとりの表情から個別の想いを探り、グループ内で開示し合う姿勢を見守り、時には働きかけることで、学生個々のアイデアが尊重され目指す方向へとストーリーやダンスの流れが固まり、作品の完成に向けチームに一体感が促進されていく過程を感じることができた。自分たちの作品をよりよいものにしようという思いが苦手意識のあった学生も動きを繰り返し試し提案する姿となり、全員でダンスすることを楽しいと感じる体験を学習することができた。学生には自己の内面の変化を通し、作品づくりを通じて異質である他者を受け入れ、対話を通して相互理解が可能となったプロセスを振り返り、社会で活かすことのできる学びとして理解を深めてほしい。

IV. 受講者の感情の変化から「ダンス」授業評価を読み取る

1. 教職課程で学ぶ学生等が「ダンス」を履修すること

中学校のダンス必修化と比較し、高等学校でダンス授業は球技・武道・と並ぶ選択科目の1つとなり、「ダンス」を科目として取り上げる高等学校が減る傾向にある。近年の生徒等の友人関係にみられる特徴は、高校入学時に得た友人との表面的な人

間関係の距離を保ったまま学校生活を送り、本音を隠し周囲に合わせて違う自分を演じ続けることで仲間との関係バランスを取る生徒の姿が散見される。このような状況に対応し、筆者（田玉）の本務校では“ダンスの授業がコミュニケーション力にやや欠ける生徒等の人間関係構築に向け効果を上げている”として評価されている。ダンスの授業は、新しい集団において人間関係が固定化される以前に、つまり1年次科目として教科に組み込むことで、クラス経営やその後の学校生活に効果をもたらすとされている。この体験を基に中学校での必修化の流れを高校教育現場に繋ぎ、初年時にダンスの授業を取り入れることで、クラスや生徒会活動集団等における生徒間交流に自他肯定の関係を生み、学校生活の基盤づくりへの効果が期待される。どの生徒にも「ここに居ていいんだ」という安心感を生む可能性がある教科であることを、教員を目指す学生等にも感じてほしい。

2. 学生の感情の変化を読み取る

大学「ダンス」講義での学習成果を受講者の感情の変化から探ることをねらい、学生及び指導者の了解を得てPOMSによる調査を実施⁵⁾した。第一段階終了時（前）と講義終了後（後）の2回実施し、学生の感情の変化を授業評価として捉えることを試みた。

受講者19名（2名欠席）の感情の変化を平均値にして図2に表した。受講者集団の感情の変化を見ると、創作活動がスタートした第一段階に測定した数値と、講義終了時に測定した数値の比較から、緊張（不安）・抑うつ・怒り・疲労・混乱の数値が下がり、活気が上がるという結果となった。このことから授業評価として、前述の記録に示された田玉・橋爪が感じているのと同様に、学生等は中盤の不安感から一変し、第二・第三段階にかけての感情の高まり、受講姿勢が変化したことがみて取れる。なお、個別の変化についても同様な結果を得

ており、ダンス受講前には負のイメージを抱いて参加した学生を含め、数値こそ異なるものの、平均値のグラフと同様の変化を示す結果であった。

V. まとめ

履修者全員が保健体育科教諭を目指すといった共通目的を持つ学習集団であった前年度までの受講生集団とは異なり、今回出会いの場で捉えた学生の姿は、一人ひとりの受講目的や意識に差がある集合体であった。気持ちが乗らない課題に向き合いそれを主体行動に変えるためには、動機づけとなる刺激と受容的環境が必要である。今期講義スタート時の学生等は、指導者の声掛けには素直に反応するものの、受身姿勢のまま既存のカブ・グループを崩そうとしないなど、ダンスに対する一人ひとりの思惑の差異が受講者間に一定の距離を生み、異質感を醸し出していた。集団として捉えるとその様子は互いに牽制し合う姿として映り、ねらいである自己解放に繋げるまでに苦慮することとなった。昨年同様の活動内容で開始した第一段階「アイズブレイク」活動では、学生の自己解放が予測したようには進まなかったこと、リーダーシップを発揮しようとする学生が現れなかったことから、学生

個々の様子を捉えつつ指導者側の指示で全体を動かそうと、努めて大きな声で動きを誘い指導者主導で進める時間を多く割く結果となった。動きを誘う中で学生は互いに声掛けや笑顔が増え、次第に個性が見えるようになった。集団内には許容的雰囲気が生まれると同時に動きも大きさを増し相互に安心を生んでいった。

終了後の振り返りレポートには、「ダンスは難しいというイメージだったが1日目でその考えを替えるような授業だった。」、「テンポの速いダンスはとても難しかったけど覚えて踊りきった時はとても達成感があり良かった。」、「身体で表現することが楽しいと思えた。」など、第一・第二段階でも、指導者が感じている以上に「楽しみ」を見出している様子が記されており、直接の表情から窺い知ることができなかったものの、リズムに乗ること・踊ることに「楽しみ」を感じている学生が多いことが分かった。難しいステップが多く含まれている現代的なリズムのダンスも、互いに教え合う内に分かる喜び、教え合う喜びを見出し、全員で揃って踊ることの爽快感も見出していた様子に指導のねらいが伝わっていたことが理解できた。また、グループでの創作段階では人間関係の氷結・解凍を繰り返すうちに互いの仲が深まり、より良いものを作ろうとする雰

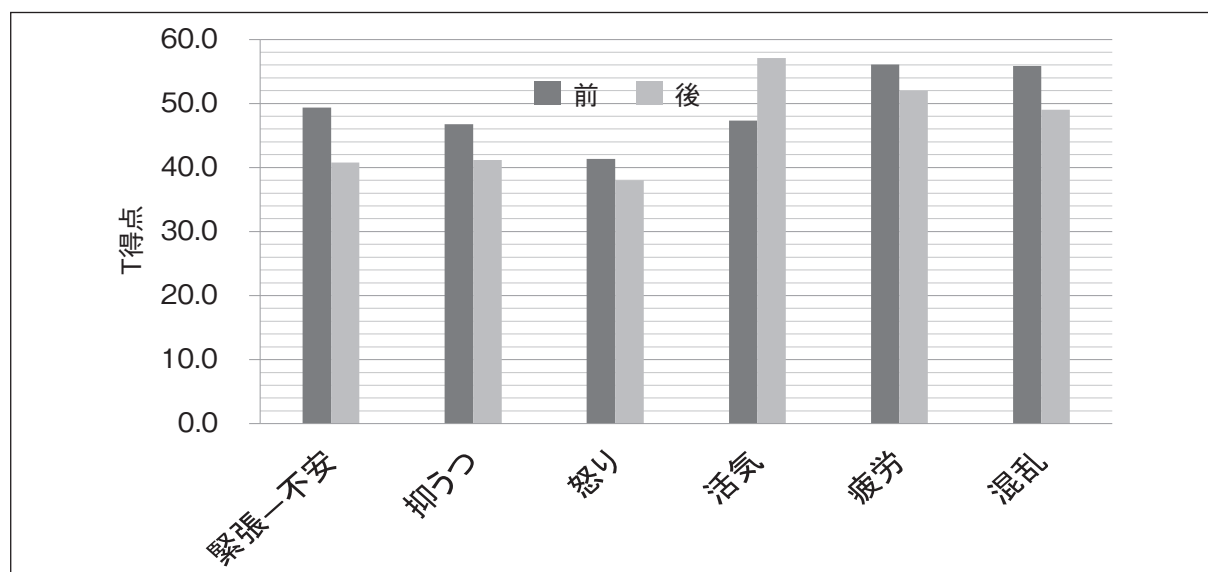


図2.ダンス授業受講学生POMS調査結果

囲気が自然に出来上がると共に、チームがひとつになり、発表を終えた時は感動を覚える仕上がりになったことが多く記されている。

指導者としては、時間内に見せていた学生等の表情や言動をうかがいながらダンスの「楽しさ」を感じているのだろうかという不安感との闘いだったが、学生の「楽しかった」というレポート内容から、学生等が授業内で見せていた感情表現が指導者に伝わりにくいものになっているのではないだろうか、違う観点での課題を発見することとなった。表情からは窺い知ることが難しかった学生の地味で控えめとも思える表現は、授業を進める指導者の感情に連鎖し、教師の不安を誘うことに気付かされた。表現の未成熟傾向を近年の生徒等の特長として受け止め、指導者は生徒等のクールな表情に影響されることなく、踊ることで引き出せる心の解放と生徒の変容を信じ授業を進めていきたい。身体をリズムに乗せて動いているうちに自己解放に向かい、それがダンスになり人は笑顔になれる。今回の集中講義を通して1つの作品を共に作り上げた達成感や一体感は勿論、感情を自由に表現し合うことの楽しさを共有することもまた、ダンスの魅力として理解させたい。

体験型学習では、活動のプロセスを重要なステップと捉えている。活動を通し「いま・ここ」で起こっていたことについてメンバー一人ひとりが感じていたことをグループ内で伝え合い、対話を通じてそれぞれの考えを統合し、次の活動に生かしていく。対話を引き出すために欠かせないのは、参加者の自己解放と他者受容の姿勢である。前述の第一段階で重要とされた学生等の緊張を解放に向けるために介入した指導者の関わりは、ファシリテーター、アドバイザーとしてまた教師として身に付けたい重要なスキルである。本講義では、第二・第三段階の「現代的なリズムによるダンス」や「創作ダンス」の領域に入っても指導者のファシリテーターとしての態度は一貫して、グループ内（学生同士）の関係性や創造的な動きの発現に照準を合わせ、必

要限度を見極めた介入を心掛けて向き合う姿があった。

最終講義時に作品を鑑賞した後、「講義計画」（表1）が資料として配布された。学生等の反応は「最初の時間に欲しかった。」であったが、「ダンス」授業のねらいが踊り方を習得したり、創作したりすることのみでないことに気づき、自らの内面に起っていた変容と照らし合わせ、仕上げた作品の良し悪しとは別の授業評価に繋っていった。学生等には自らの体験を振り返ることで体感したダンス教育が持つ教育効果の豊かさを、教師として学校現場で活かすことを期待したい。

文献

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)平成28年12月21日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afielddfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- 2) 文部科学省「中学校学習指導要領解説保健体育編」平成20年7月
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afielddfile/2011/01/21/1234912_009.pdf
- 3) 「中学校ダンスの男女必修化の課題」順天堂スポーツ健康科学研究 第1巻第1号(通巻13号)27～39(2009)
<http://www.juntendo.ac.jp/hss/albums/abm.php?f=abm00008309.pdf>
- 4) 中村恭子「日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題」スポーツ科学研究Vol.21 No.1p.37-51(2013)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjss/21/1/21_37/_pdf
- 5) 株式会社金子書房 心理検査部(POMS資格登録)2011(平成23)年3月)